

24

下顎枝垂直骨切り術により顎変形症と顎関節症の同時治療を行った1例

(口腔外科) ○後藤乙彦, 千葉博茂, 藤川 考  
仲井孝之, 渡辺 崇, 高尾直伸  
柳井 丈, 吉谷智美, 金子忠良  
(矯正歯科) 鈴木 巖

顎関節症は顎関節や咀嚼筋の疼痛, 関節雑音, 開口障害ないし顎運動異常を主要症候とする慢性疾患群の総括的診断名である. 付随的に肩こりや頭痛を訴えることもあり, いっばう悪化すると会話や摂食が困難となる場合もある.

顎変形症は上下顎の絶対的あるいは相対的位置異常であり, このため顎口腔機能の障害や審美的問題が存在する. 多くの場合, 外科的矯正手術が適応となり, 咀嚼・発音・呼吸などの顎口腔機能の回復および顔貌の審美性の改善を治療目標とする.

外科的矯正手術が適応となる患者のなかには, 顎関節症を伴う者が少なからず存在する. 外科的矯正手術と顎関節症の治療のどちらを優先すべきか, 外科的矯正手術により顎関節症を悪化させる危険性はどのようなものか, 個々の患者の治療にあたり苦慮することが多い.

今回, 顎関節症を有する顎変形症患者に, 新しい外科的矯正手術方法として, 下顎枝垂直骨切り術を採用することにより, 同時に顎関節症の治療もはかり, 極めて良好な成績を得たので, その概要を報告する.

25

顎関節鏡視下手術の術後成績の検討

(八王子・口腔外科)  
○浪越 智子, 原口 浩見, 小川 隆  
(口腔外科)  
千葉 博茂

【目的】近年, 低侵襲性の関節鏡視下手術の普及により顎関節内障クローズド・ロック症例においても積極的に外科的療法が選択されるようになってきている. 今回, 我々は過去3年間に当科で行った関節鏡視下術の術後成績について評価した.

【対象】1994年3月から1997年12月の間に八王子医療センター口腔外科で顎関節内障クローズド・ロックと診断し, 術前にMR画像診断を行い関節鏡視下術を施行した21関節(男性2例2関節, 女性19例19関節)で, 年齢は14歳から63歳(平均32.9歳). 術後観察期間は2ヶ月から30ヶ月(平均9.8ヶ月)であった.

【方法】米国顎関節外科学会の病期分類案に基づき術前の臨床症状, 画像診断, 術中関節鏡視所見により病期分類を行った. また, 各病期における臨床症状と手術成績を比較検討した.

【結果】病期分類はstage III 12関節, stage IV 9関節であった. 術前開口度および標準偏差はstage III  $29.1 \pm 3.3$  mm, stage IV  $28.0 \pm 4.5$  mmであった. 術後開口度および標準偏差はstage III  $42.3 \pm 3.2$  mm, stage IV  $41.3 \pm 4.3$  mmであった. 手術成績はstage III 「優」11関節(91.7%), 「良」1関節(8.3%), stage IV 「優」6関節(66.0%), 「良」2関節(22.2%), 「不良」1関節(11.1%)であった. すなわち, 奏効率は全体で95.2%であり, stage III 100%, stage IV 88.2%であった.

【結語】米国顎関節外科学会の病期分類案に基づいて, 当科で行った顎関節鏡視下手術の術後成績を検討した. その結果, 高い奏効率が得られ, 顎関節症stage III, IVに対して本手術法は有用な治療法と考えられた.